

新「文学国語」において 多面的・多角的思考力を育む「読むこと」の指導 ーダイス法を用いた『舞姫』の読みからー

森 陸史 (M18EP013)

1. 新学習指導要領における文学軽視

高等学校における新学習指導要領（以下、新要領）の実施が 2022 年 4 月に迫ってきている。新要領では、文系教科において科目の再編が大規模になされている。特に国語科ではそれが顕著である。これまでの共通必修科目であった「国語総合」（4 単位）が廃止、代わりに新要領では「現代の国語」（2 単位）「言語文化」（2 単位）が必修科目となった。また、それを終えた上での選択科目として、現行では「国語表現」（3 単位）「現代文 A」（2 単位）「現代文 B」（4 単位）「古典 A」（2 単位）「古典 B」（4 単位）となっていたが、これらも新要領では「国語表現」（4 単位）を残し全て廃止、その代わりとして「国語表現」の他に「論理国語」（4 単位）「文学国語」（4 単位）「古典探究」（4 単位）となった。これらは現行の「大学入試センター試験」に代わって新しく導入される「大学入学共通テスト」とともに、現在の高等学校における国語科教育に対して文部科学省からの強烈的なメッセージ、ととらえてよいだろう。すなわち、今のままでの国語ではだめだ、改善せよ、と言っているのである。

しかし、このような強烈的なメッセージに対して、教育現場では不安の声も上がっている。現実問題として、新要領における国語科の教育課程はどうしたらよいのかという不安がある。大学進学を重視する高校では、大学入試を念頭に、現行では国語科の選択科目として「現代文 B」と「古典 B」を採用している学校が多い。これを新要領に合わせて変更しようとする、「古典 B」は「古典探究」にそのまま移行するにしても、「現代文 B」は授業時間数の関係で、どうしても「論理国語」か「文

学国語」のどちらかを選択せざるを得なくなってしまう。実用的な文章が取り上げられる「大学入学共通テスト」の動向などを踏まえると、おそらく「論理国語」を選択する学校が増えるだろう。つまり、「文学国語」の授業はできないのである。

このことは最近の新聞などでもたびたび取り上げられている。2019 年 4 月 27 日付けの毎日新聞では「高校国語 論理重視へ」と題し、国語教育における二人の著名人の考えを記事にしている。「言語芸術は、音楽や美術と並んで、「芸術」として選択必修にするのがよい」（野矢）「情緒力を身につけるには（中略）最も適している教材が童話、物語、詩などの文学」（藤原）など、興味深い意見が示されている（毎日新聞、2019）。また、2019 年 3 月 12 日の山梨日日新聞のコラムである「風林火山」では、平成 31 年度山梨県公立高等学校入学選抜学力検査の国語において小説が出題されなかったことを話題にしている（山梨日日新聞、2019）。芸術として扱うべきだ、「読む力」ではなく情緒力が身につく、小説が高校入試に出ない、これらの見解や事実は、教育における文学軽視ともいえる昨今の状況を如実に表しているといえよう。

しかし、高校国語科において文学の灯が完全に消えたわけではない。新要領において残してくれた、といってもよい「文学国語」という科目の必要性、重要性を示すことができれば、このような事情も変容してくる。そのためには「文学国語」において、どのような資質・能力が身につくのかを内外に示す必要があるだろう。新要領では「文学国語」の育成すべき思考力・判断力・表現力等として、「読むこと」において次の指導事項がある。「カ

作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めること。」(文部科学省, 2018)ここに筆者は注目する。これこそが、文学「だからこそ」身につく資質・能力なのではないだろうか。

だが、その道のりは容易ではない。これまでの「講義調の知識伝達型授業」では到底身につかないだろう。その方策として高木(2018)は「読むことは、一人一人の生徒のコンテキストをもとに、自分なりの読みを形成することにより、その読みが誤読とならないために、どのように読むかを学ぶことこそ、高校の国語授業に求められている。これまでの文学の授業が担ってきた作品論や作家論、さらには読者論を含め、一人の読み手として文学を読むだけではなく、教室の他者と同じ文学を対象として、多義的・多面的な読みを形成することも、教室の読みとして重要」(高木, 2018)として、教室の他者との対話を通した多義的・多面的な読みの形成の必要性を述べている。しかし、これには一つ問題がある。「一人一人の生徒のコンテキスト(文脈・背景)」にそこまでの差異はないのではないか、という問題である。

筆者は昨年、高校の現職教員でありながら、山梨大学教職大学院の学生として、教室の中で様々な対話をしてきた。それぞれの研究分野を持つ大学教員、中学校や小学校の教員、大学を卒業したばかりのストレートマスターと呼ばれる院生たち。彼らのコンテキストは私とは全く違い、その対話の中で改めて「教育」というものについて多面的・多角的に考えることができた。高校の教室の中でも、そのような空間は作れないものだろうか。

本研究では、新要領の「文学国語」を念頭に置き、個人のコンテキストによる思考だけではなく、多面的・多角的思考力の育成を目標とした授業実践を通して、高校における文学教育の可能性を探ることを目的とする。

2. 方法

筆者の所属高校の3年生に対して、「ダイス

法」(森, 2019)を用いた『舞姫』の授業実践を行った。『舞姫』は定番教材ではあるが、ともすればその読みは一義的になりがちである。が、様々な側面から考えることのできる作品でもあるという点において、多面的・多角的思考力を育むのに適している教材だと考えた。また、「ダイス法」とは、筆者が昨年の研究で提案した多面的・多角的思考力を育むための汎用的授業方法である。転がるサイコロのように立体的に、多面的に生徒が見られるようになることを目標とするので、これを「ダイス法」と名付けた。以下にその概要を記しておく。

ダイス法の概要

①多面性のある事象を「問い」とする

物事は一面的ではない。ほとんどすべての事象が多様な側面を持ち、観点を変えれば全く異なる側面が立ち上がるものである。社会的事象でも、科学的事象でも同様だ。オープンな問いの方が良いと思うが、小学校などの発達段階によってはクローズされた問いでも構わない。知識構成型ジグソー法では「3つか4つの知識を部品として組み合わせることで解けるもの」(東京大学 CoREF, 2009)という問いを設定する、としているが、ダイス法では「面」が重要である。多面的に捉え得る、様々な側面を持っている事象を対象とすることが必須である。

②その「問い」について多角的に考えさせる

その多面性のある事象の「面」を捉えさせるために、「角度」、つまり思考するためのいくつかの観点を生徒に与える。個人でもグループでも構わない。教室の人数、実態に合わせればよい。その角度から「面」を作る。

ここでいう「角度」とは、先に挙げた知識構成型ジグソー法でいうところの「部品」ではない。部品から構成されるのは一面にしか過ぎないからだ。角度とはすなわち、立場、条件、視点、観点などと言えるものである。それらを規定し得るものには、前提、地位、身分、役職、姿勢、スタンス、世代・年代、国・地域、ジェンダー、社会、文化、歴史、

各登場人物たちは小説の中で豊太郎と深く

関わる人物も多い。ストーリー上のある時点での豊太郎に対する思い、ではなく、その人間性・人柄・人格・価値観などから考えることとした。特にDエリスは物語の終盤に精神を病んでしまうので、そうしたことがなく、正常な思考ができる状態として考えるように補足説明をした。生徒にはない、登場人物たちのコンテクストから、多様な考えを引き出そうとした。また今回も、ただの自分勝手な思いとならないように、根拠と理由を記述させた。人物の人間性などを示す本文の記述と、豊太郎の生き方に関する記述を根拠に、理由とともに考えさせた。これらはグループで取り組ませた。40人学級での授業だったので、5人班を8班作り、それぞれに考える角度として各登場人物を割り当てた。どの登場人物にするかは、班の代表に話し合い（最終的にはじゃんけんになった）で決めさせた。本文に、その人物に関する記述が少ない人物がやはり不人気であった。Fのシャウムベルヒになってしまった班長は、班員に恨み言を言われている様子であったが、それがかえって、よいアイスブレイクになったようにも教授者としては感じた。以下が生徒に取り組ませた学習プリント②の例（図2）である。

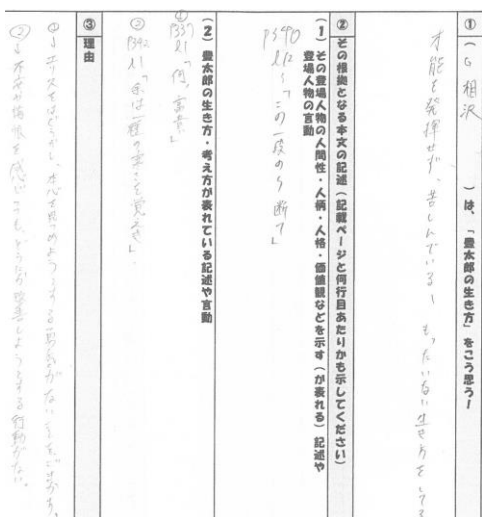


図2 学習プリント②

各班とも話し合いは活発に行われていたが、実際には授業時間内に終わらず、次回までの課題とした班も多かった。次時の予告として、登場人物の視点に立った、豊太郎の生き方に

対する思いを「面」として表し、それを次の時間に発表し共有することで多面的に考えることを伝えた。

第10時（ダイス法③④）

ダイス法③ 面の共有

前時、もしくは課題で取り組んだ各班の「面」を、発表してもらった。各班にA3サイズホワイトボードを渡してあったので、その表記をもとに、各班の代表に発表してもらった。以下の図3がその発表用ホワイトボードである。学習プリント②の各項目を、端的に書くよう指導した。各班の考えた、各登場人物が豊太郎の生き方に対して抱くであろう①思い②根拠③理由をそれぞれ書いている。

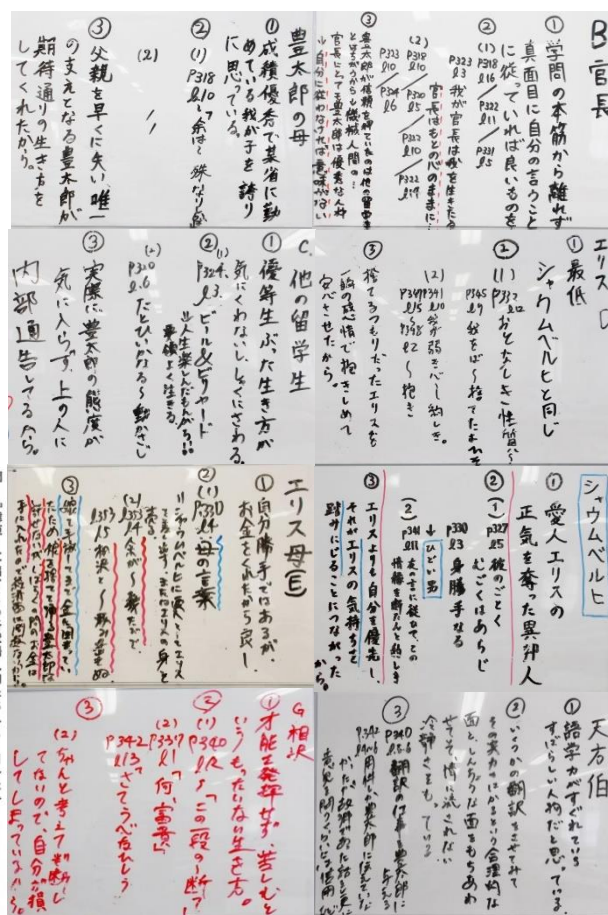


図3 発表用ホワイトボード

これらの中でも、図2でも例示したG相沢謙吉班の発表が、聞いている生徒の反応が最も良く、その後の捉え直しの記述に与えた影響も大きかった。生徒の発表の内容を以下に記す。（表1）

生徒 えっと、相沢謙吉は、豊太郎は素晴らしい才能を持っているのにそれを発揮しないで苦しんでしまうというもったいない生き方をしていると思うと思いました。えっとそれは、340 ページの 12 行目にある「この一段のことは」からの相沢の発言（筆者注：相沢が豊太郎に忠告している場面。その中で相沢は「学識あり、才能あるものが、いつまでか少女の情にかかづらひて、目的なき生活をなすべき」と言っている。）から、もう、ストレートにそう考えました。で、あと、豊太郎自身も、337 ページの 1 行目の「何、富貴。」の言葉でエリスからの発言をはぐらかしたりして、その、自分にとって面倒くさいことを後回しにしちゃって、あとで自分が後悔する、っていう、もったいない、サイクルみたいのを繰り返しちゃうかな、って。で、あと、342 ページの 13 行目（筆者注：天方伯にロシアについていくかを聞かれ、すぐに承諾してしまった場面。）に、豊太郎は自分で言っているんですよ、自分は、重大な局面、難しい、実行するのが難しいことを、簡単に承諾して、あとで、難しいってことに気づいて、ま、自分が損する、ってことを言っているんで、まあ、もったいない、そんだけ考えるくらいの、頭があるのに、あんまり重要に考えない、自分の才能を、あんまり発揮しない、で、苦しんでしまっているという、もったいない生き方をしているな、って相沢は思うと思いました。（傍線、筆者）

① (E エリスの母) は、「豊太郎の生き方」をこう思う!	私も悔やみながら生きていく
2 女の裏切るひどい男の生き方	私を裏切つた母は、豊太郎の生き方を、 「母は我が身の過さしころにほ似て思ひ定めて見るを見ればくれめ」(P345 L10)
3 豊太郎の生き方、考え方が表れている記述や言動	「母は我が身の過さしころにほ似て思ひ定めて見るを見ればくれめ」(P345 L10)
4 豊太郎の生き方、考え方が表れている記述や言動	「母は我が身の過さしころにほ似て思ひ定めて見るを見ればくれめ」(P345 L10)
5 豊太郎の生き方、考え方が表れている記述や言動	「母は我が身の過さしころにほ似て思ひ定めて見るを見ればくれめ」(P345 L10)
6 豊太郎の生き方、考え方が表れている記述や言動	「母は我が身の過さしころにほ似て思ひ定めて見るを見ればくれめ」(P345 L10)

教員 みんなにやらしているばかりじゃ悪いから、俺とね、山梨大学教授の長谷川先生にもやってもらったんですよ。ちょっとそれをね、紹介して本日のまとめとしたいかなと思います。(記載例配布する) えっと、①。エリスの母がね、一番違いが出たかな、と思ったので、エリスの母をね、みんなに紹介しておきたいかなあ、と思いました。えー上段と、下段とで、僕と長谷川先生とで、やったものなんですけど、どっちが、僕がやったと思いますか。どっちが長谷川先生だと思いますか。

生徒 うーん、森先生が上。

生徒たち (笑い)

教員 えーとね、これね、結局、登場人物の視点は借りているけど、やっぱりその、読み手。読者を通して読んでいることには変わらないわけですよ。だからこういう違いも出てくるのかなあとと思います。僕は、エリスのお母さんは、最終的には娘思いだったんだと思うんですよ。協力的だったし、あの②のね、(1)のところなんかを見てもらうとね、「されど我が身の過ぎしころには似て思ひ定めたるを見て心折れぬ」で、もうわかったわ、と。あんたの好きなようにしなさい、日本にね、豊太郎と行くんだったら、私は親せきのところにも行くわ、っていう感じでね、だから、すごい協力的だなと思ったんだよね。最終的には娘思いなのかなあ、と思って、女を裏切るひどい男の生き方、という風に豊太郎のことと思うかなあ、と考えたんですが、長谷川先生なんかはね、「私も悔やみながら生きていく」という感じで、エリスのお母さん考えるんじゃないかな、ということで、やっぱりですね、エリスのお母さんは二面性を持っているんじゃないかと。体を売るように迫る一方でですね、豊太郎とエリスにすごい協力的でした。

そういった二面性を持つお母さんは、豊太郎を恨む気持ちは持ちつつも、その生き方を一方的に責めるってことはできないんじゃないかな、と。エリスを追い詰めたのはお金を受け取った自分も同じであり、私も豊太郎とともに悔やみながら生きていく、と考えてくれました。これはね、決して男性女性だからってだけじゃなくてですね、これまで僕たちが生きてきたところの価値観だったり、その、考え方だったり、で、こういったいろんな考えが出るのかな、と。で、これから先もそういう刺激をすごく受けるんじゃないかな、と思うんですよね。ここにサイコロがあるんですが、これはふざけて持ってきたわけではなくて、みんなにイメージしてほしいんですけど、みんなは最初に読んで、まず、一面的に読んだと、考えたんだと思うんですよね。豊太郎、ひどい奴、って。それは決して間違っていない。高校生の今の段階で、君たちの考え、なわけだからそれは間違っていないわけなんですけど、今日ね、みんなに考えてもらったように、いろんな考え方ってありますよね。いろんな価値観。人柄。思い。別に人間性だけではなくて、いろんな視点というのがあるんですよね。例えば僕みたいな国語教師から見た授業と、数学の先生から見た授業と。今日はね、大学院生もたくさん来てくれているんだけど（筆者注：研究授業ということで参観していただいていた）、大学院生から見た僕の授業だったり、大学教授から見た僕の授業だったり、教頭先生から見た僕の授業だったり。こういったいろんな面が、この世の中にはあるかなって思うんですよね。それを、このサイコロのように、多面的に、立体的に捉えられるようになると、これから先、みんなのね、思考力っていうのが、どんどん膨らんでくるんじゃないかなと思うんですよ。そう考えて、今回の授業は設定しました。ちょっとね、難しい言葉でいうと批判的思考力って言いますよね。この批判っていうのは別に否定するだけじゃなくてね、いろんなところに「気づき」「引っ掛かり」を持って

ほしい、ということだと僕は理解しています。これまでの授業の中でもね、僕はここに引っ掛けてほしいんだよ、この言い回しに気づいてほしいんだよ、というような言い方をしてきました。だから、今回のですね、登場人物に視点を借りるっていうのは、気づきや引っ掛かりをたくさん持つ、きっかけになるんじゃないかな、と思うんですよね。ああ、そういう考え方もあるのか、そういったところにたしかにこの登場人物だったら引っ掛かりを持つはずだ、気づきを持つはずだ、そういったものを、登場人物の視点を借りて、たくさん持てるようになるかなと思いました。多面的・多角的思考力。いろんな角度をもって、いろんな角度から面を見ることによって、最終的に、多面的に、立体的に、物事がですね、見られるようになるんじゃないかなと思ってます。今日の授業はね、そういった意味ですごくよかったんじゃないかなと思ってます。そしたら、今の話も受けてですね、最終的にまとめてほしいかなと思います。

ダイス法④ 多面的に捉える

振り返り終了後、改めて個人で豊太郎の生き方を捉え直した。以下が問いである。

【あなたは、豊太郎の手記を読み、「豊太郎の生き方」をどう思うか？自由に記述せよ。
※各班から出された、各登場人物たちが抱くであろう「思い」を踏まえて、改めて捉え直してみてください。】

今回は各班から出された各登場人物が抱くであろう「思い」を根拠としてほしかったので、自由に記述せよ、とした。生徒の記述をダイス法①時点での個人の答えと比較し、「A. 豊太郎の生き方の捉え方に変化が生じ、多面的に考えられている。」「B. 豊太郎の生き方の捉え方に変化は生じていないが、多面的に考えられている。」「C. 豊太郎の生き方の捉え方に変化が生じているが、多面的には考えられていない。」「D. 豊太郎の生き方の捉え方に変化が生じていない。多面的にも考えられていない。」の4種に分け、分析した。結果とそれぞれの記述例を以下に示す。（表2～5）

表2 Aの結果と記述例

A. 豊太郎の生き方の捉え方に変化が生じ、多面的に考えられている。24人(38人中)63.2%

例 ダイス法①での記述
自分の意志が弱く、その場しのぎに生きる悪い生き方だと思う。



例 ダイス法④での記述
自分の意志が弱く、エリスや、官長たちに対して、その場しのぎで生きるところは良くないと思ったが、周りの人たちに押し流されて、自分自身を苦しめながら、才能を発揮できずに生きているところは、かわいそうだった。豊太郎は幼い時から、周りの大人たちの期待に応えようと頑張りすぎて大人になってから自我に目覚めて暴走してしまったようなところがあったので、小さいころから、そんな生き方をしてきたところもかわいそうだった。豊太郎が捨てるつもりだったエリスも結局捨てきれず、最後に抱きしめたところを、最低だというふうにもとらえられるが、私は、最後の最後まで、エリスを愛していたにも関わらず、日本に帰ることを決断した豊太郎の決断力は、その場しのぎのところもあるが、すごいと思った。

表3 Bの結果と記述例

B. 豊太郎の生き方の捉え方に変化は生じていないが、多面的に考えられている。13人(38人中)34.2%

例 ダイス法①での記述
最終的には自分の名声を気にする、プライドの高い人だと思った。自分の悩みや思いを素直に誰かに打ちあけることができない不器用な生き方だと思った。



例 ダイス法④での記述
エリスに出会うまでは、豊太郎は、一人で育ててくれた母のことや、自分の家のことを一番に思えるとても真面目な人であった。遊ぶことなく、すべてを勉強や仕事に時間を費やせる、とても努力家であった。そのため、官長や母からの信頼も厚く、母からは、誇りに思われて期待をされ、官長からはとても良い評価を得られていた。しかし、エリスに出会うことで、今まで自分の心の中にあった真面目ではない部分が目覚めてしまった。だが、真面目ではない部分が目覚めてしまったのは、単にエリスと出会ってしまったからというわけではないと思う。豊太郎は今まで模範解答のような正しい生き方をしてしまったがゆえに、ずっと我慢していたストレスなどに耐えきれなくなってしまうからでもあると思う。また、豊太郎の心の中で変化したいと思う気持ちや、本来の自分らしい生き方をしたいと思う気持ちからでもあると思う。また、エリスを選ぶか、仕事を選ぶかという決断にせまられているとき、誰かに相談できていればそんなに苦しい思いをしなかったのと思った。そのような部分に豊太郎の不器用さが表れている。

表4 Cの結果と記述例

C. 豊太郎の生き方の捉え方に変化が生じているが、多面的には考えられていない。0人(38人中)0.0%

これに該当する記述はなかった。多い・少ないの違いはあるが、自分の班や他の班の意見をふまえて記述しているものがほとんどだった。

表5 Dの結果と記述例

D. 豊太郎の生き方の捉え方に変化が生じていない。多面的にも考えられていない。1人(38人中)2.6%

例 ダイス法①での記述
こんな生き方はしたくない。



例 ダイス法④での記述
エリスの母が「私も悔やみながら生きていく」というのは、自分には全くない発想で、かつ、納得できる考え方で深く感心した。それでもやはり、被害者面で加害者意識が欠けている、人間として失格な生き方だと思う。

ほとんどがA・Bにあてはまった。多面的に捉えられているという点で、評価は同等としてよいだろう。Aの、豊太郎の生き方の捉え方に変化が生じた生徒は、そのほとんどがダイス法①の時点では豊太郎の生き方に対して否定的な記述をしていた生徒たちである。Aの例に挙げた生徒のように、「悪い生き方」から「かわいそう」「すごい」というような表現への変化が見られた。単純な、豊太郎＝悪い奴、という思考から抜け出せた点において、まずは成果としたい。ただし、例のように色々な要素を持ってきて多数にわたる多面的な記述が見られた生徒も多かった一方で、自分たちの考えた一面を思考の中心に据えている記述もあった。

Bのほとんどの生徒たちは、ダイス法①の時点においてすでに、単純な否定的な捉え方から脱却した、または脱却しようと試みていた生徒たちである。こういった生徒たちの記述は、結論的なところでは変化が生じていないが、多面的に捉えた上で結果としては変化しなかった、という記述であった。これも例のように多数の面からの思考が見られる記述が多かった一方で、少ない面による記述も見受けられた。

Cにあたる記述も想定していたが、結果としてはなかった。前述のように少ない面による思考か、多数の面による思考かの違いは見られたが、複数の面からの思考、と考えられるものであった。

Dに該当する記述は例に挙げた一点であった。しかし、これも別の面にも納得や感心したという記述が見られるので、そういった意味ではBに該当するとも考えられる。他の面との比較の上で、自らの思いを強固にした記述への評価の在り方も今後考えていきたい。

4. 総合考察

文学学習におけるダイス法の有効性は示れたと考える。これを強固にするためにも、今後はさらに実践を重ねていきたい。『舞姫』においても、今回の登場人物という角度の他に、時代による考え方の違い、国による文化の違い、さらには既習の文学作品の登場人物（『羅生門』における下人、など）の視点、こういった角度の設定も考えられる。さらなる多面性・多角性を模索していきたい。

ところで、今回の授業実践後、これも定番教材である『「である」ことと「する」こと』という評論文を授業で扱った。そこでクラスの日記に興味深い記述をしている生徒がいたので紹介したい。以下の表6である。

表6 クラス日記の記述

日記	現文（筆者注：現代文Bのこと）で「である」ことと「する」ことを読んで、大学生「である」だけでなく、そこで何を「する」のか誇れるような生活を送りたいと思いました。高校生活では部活もやって、学園祭も主役をやって3年のこんな時期まで色んなことを「させて」もらえたのはすごいことだなと感じます。本文には、「自分が『とらわれている』ことを…見つけている者は、…努力をすることによって、相対的に自由になり得るチャンス」があるとあります。現文は依然、「舞姫」を読んでいましたが、豊太郎の姿がピッタリそれに重なるなと感じました。プロイセンに留学して、自由の空気を感じ、今まで自分がエリートコースに「とらわれていた」ことを知ったんだろうな、と。でも、豊太郎はその結果、非常に苦しむことになる。あくまで自由になるためには、「…努力をすることによって」という過程が必要なのだと思います。でも豊太郎はその努力をしきれなかった。エリスとの恋も成就しなかった。別の作品を通して、大嫌いだっただ「舞姫」も面白い点に気づけたなと思います。…みたいなことを大学で「して」いきたいです。
----	---

単純に一つの評論文を読んだだけでは決して生まれない、良い考察である。今回の授業実践との因果関係は検証しにくいところではあるが、決して受け身ではなく、ある視点を持って立ち止まり、自らの意見を持てたことが見て取れる。文学を学ばないということは、このような思考も生まれにくくなることを意味する。

文学を学ぶ意義とは何か、この問題について単純には言えない。しかし、新「文学国語」の「読むこと」の指導事項である「力 作品の内容や解釈を踏まえ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方を深めること。」は、魅力ある文学作品にその可能性があるからこそ、ではないだろうか。つまり、「文学だからこそ、人間、社会、自然などに対するものの見方、感じ方、考え方は深まる。」と言える。地歴公民科など、他教科においてもそれを深める要素はあると思うが、魅力ある文学作品に勝るものはない。新学習指導要領、センター試験に代わる大学入学共通テスト、このような変革期だからこそ、文学を学ぶ意義を発信していきたい。文学だからこそ、いや、文学でしか、育むことのできない能力がある。本研究が、その可能性を示す一つになれば幸いである。

引用文献

- 国語教室編集室編（2019）国語教室 第110号 大修館書店
毎日新聞 全国版（2019）論点 高校国語 論理重視へ 2019.4.27
文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成30年告示）
森陸史（2019）高校国語科において多面的・多角的思考力を育む「問い」とその授業の在り方—国際バカロレア教育のTOK（知の理論）を用いた評論文指導から— 平成30年度山梨大学教職大学院研究報告書
奈須正裕・江間史明編著（2015）コンピテンシー・ベイスの授業づくり 図書文化
大滝一登・高木展郎編著（2018）新学習指導要領対応 高校の国語授業はこう変わる 三省堂
東京大学 CoREF（2009）知識構成型ジグソー法 <http://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515>
2018.12.22
山梨日日新聞（2019）風林火山 2019.3.12